

注維摩經の異本について

木村 宣彰

後秦の弘始八年（四〇六）に鳩摩羅什が漢訳した維摩詰所説経三卷は、その後の東アジアの仏教界のみならず広く文化・芸術等の分野においても実に多大の影響を与えている。しかし、中国において維摩經への関心が高まったのは決して鳩摩羅什の入関を待って端緒が開かれたのではない。維摩經が中国へ伝わったのは三国時代に呉の支謙によつてであった。広く六ヶ国の言語に通じ、かつ中国の古典に関する教養を身につけていた在俗の帰化知識人であった支謙が、呉の都建康に於いて孫権の黄武初年（二二二）から孫亮の建興年間（二五二―二五三）に至る間に大般泥洹經・瑞応本起經・阿弥陀經などと共に維摩詰經二卷を訳出したのである。東晋の初めには江南の仏教界や貴族社会でこの經は盛んに誦誦され、屢々講義されたのである。慧皎の高僧伝によれば、東晋の支遁が晩年に山陰に維摩經を講じたとき、都講の許詢との間で激しい問答応酬が展開されたという。その他にも世説新語の文学篇などにも支遁の維摩經講義に纏る逸話を伝えている。当時の思想界における維摩經への関心が如何に高かったかを如実に示すものである。

更に西晋時代には西域三十六ヶ国の言語に通じ万人から敦煌菩薩と尊称された竺法護によつて泰始（二六五―七四）から永嘉二年（三〇八）に至る間に維摩詰經一卷が訳出されている。加えて西晋の元康元年（二九一）には竺叔蘭が

維摩詰經二卷（或いは三卷）を漢訳している^④。このように陸統と異訳の維摩經が翻訳され、仏教界に提供されるといふことは、旧来の經典よりも正確で權威のある漢訳仏典を求める社会の甚だ強い要請に応えるものに外ならない。

維摩經を訳出した竺法護はその煩重を厭って刪維摩詰經一卷を作っている。既に散佚し正確に内容を知ることが出来ないが、恐らく偈頌などを刪削したものであろう^⑤。また、支敏度は当時広く流行していた維摩經の異訳諸本を対照して読むことを可能にすべく諸本を合糅して合維摩詰經五巻を編んでいる^⑥。これらの営為もただ単に竺法護や支敏度の個人的な研究目的に適うものではなく、正しくその時代の強烈な維摩經への関心に呼応したものと理解すべきである。

白衣の居士である維摩詰を主人公として展開する文学的構成と空・無執着の実践を強調する内容とが、無為自然を尚ぶ老莊思想に近似しており、魏晋以来の玄学的風潮によく投合して維摩經が持て囃されたのである。玄学流行の時流と相俟って西晋時代から漸く勃興しつつあった維摩經研究は、弘始三年（四〇一）に後秦の国主姚興によって国師の礼を以て長安に迎えられた鳩摩羅什が維摩詰所説經三巻を翻訳するに及んで俄かに隆盛を来したのである。このことは従来の支謙・竺法護らの訳經は訳文に不備があり、維摩經を求める思想界の要請に十分に応えていなかった点を鳩摩羅什の入関を待つて補完しようとしたものである^⑦。

鳩摩羅什の維摩經の訳場に参与した僧肇は次のように語っている。

大秦天王、俊神超世、玄心独悟。……每尋翫茲典以為栖神之宅、而恨支竺所出理滯於文。常懼玄宗墜於訳人。

北天之運、運通有在也。以弘始八年歲次鶉火、命大將軍常公・左將軍安成侯、与義学沙門千二百人於常安大寺請羅什法師重訳正本。什以高世之量冥心真境、既盡環中又善方言時手執胡文口自宣訳、道俗虔虔一言三復、淘治精

求務存聖意。其文約而詣、其旨婉而彰。微遠之言於茲顯然。

(大正五五・五八b)

国主姚興は鳩摩羅什の入関以前から呉の支謙や西晋の竺法護らによって訳出された旧経の維摩経に親しみ自ら「栖神之宅」となしていたが、ただ惜しむらくはこれらの翻訳が完全ではなく意味の通じないところのあることを残念におもっていた。それは訳者の經典に対する理解が未だ不十分で経の真意を誤解していたことに起因するものであった。そこで欠陥の多い旧訳本の維摩経の再訳を熱望していた姚興は、鳩摩羅什に維摩経正本の重訳を要請し、常山公姚顛並びに安成侯姚嵩に訳場の監督を命じたのである。僧肇に従えば鳩摩羅什の維摩経重訳の直接原因は、既訳經典の經文に不満を有していた姚興の要請に由るものと述べているが、それは単に国主のみの判断に因ったものではなく、広く社会全体が等しく切望するところであつた。

多数の鳩摩羅什の門下の中にあつて取り分け深く訳経事業に携わっていた僧叡は、

既蒙究摩羅法師正玄文摘幽指、始悟前訳之傷本謬文之乖趣耳。

(大正五五・五八c)

と述べている。かかる社会の情況にあつて鳩摩羅什は正確な訳文を提供したのみならず、自ら訳出した維摩経について講述し、注経を為したのである。かくして鳩摩羅什の門下を中心として維摩経の研究は最高潮に達することになるのである。

鳩摩羅什が維摩経の講義を為したことは、直接にその聴次に預つた僧肇の維摩詰経注序や僧叡の毘摩羅詰提経義疏序によって明白に知ることができるのであるが、更に慧皎の高僧伝には次のように記している。

唯為姚興著実相論二卷、並注維摩、出言成章、無所刪改、辭喻婉約、莫非玄奧。

(大正五〇・三三二c)

訳経を本領とした鳩摩羅什が、国主姚興の為に実相論を著し、維摩經の注釈を為したのである。のちに天台智顛が晋王楊広の懇請に応じて維摩經文疏を著したのと軌を一にする。高僧伝の著者慧皎は鳩摩羅什が姚興の為に著した維摩經の注疏の具名や巻数を何ら記録していないが、隋の法経らが編纂した衆経目錄卷六の此方諸徳伝記の下には「維摩經注解三卷 羅什」(大正五五・一四七^a)と記録している。師の学問上の関心や課題は、当然その門下にも反映する。鳩摩羅什に倣つてその門下においても活発に維摩經の研究が為されたのである。入関して間も無い鳩摩羅什を訪ねて師事し、早速に禪經の訳出を請い、又訳出された多くの經論に序文を撰した僧叡も維摩經の注釈たる毘摩羅詰提經義疏を撰している。高僧伝卷六の僧叡伝には成実論の講述については伝えていないが、維摩經のそれには何ら言及していない。しかし、出三蔵記集卷八に収める彼の毘摩羅詰提經義疏序が、僧叡と維摩經との関りの濃密さを如実に物語っている。僧叡の義疏序に、

因紙墨以記其文外之言、借衆聽以集其成事之説。煩而不簡者遺其事也。質而不麗者重其意也。(大正五五・五九^a)と述べ、

是以即於講次疏以為記、冀通方之賢、不咎其煩而不要也。

(大正五五・五九^a)

と結んでいる。彼がしばしば鳩摩羅什の講筵に列し、聴講にもとずいて毘摩羅詰提經義疏を著したことは明らかである。その逸文は種々の書物に引用されて伝わっている。⁸⁾

更に鳩摩羅什門下の道融は、かの姚興から奇特の聡明釈子と歎ぜられ、勅によつて訳場の参正を勤めた俊英であった。現に鳩摩羅什は道融に対して中論や新法華經の講義を命じ、自らそれを聴き、「仏法之興融其人也」(大正五五・三六三^c)と称歎しているのである。その道融は法華・大品などの諸經の義疏と共に維摩經義疏を著し、共に世に行

われたことを高僧伝巻六の道融伝に伝えている。実際に現行の注維摩経にその注釈が僅かに一文のみではあるが引用されているのである。

かの僧肇も維摩経に尽瘁し、その注釈を為したことは周知の通りである。僧肇は毎に莊老を以て必要となしていたが、旧維摩経に接してはじめて自らの心の帰する所を知り、出家したのである。しかもかつて入闍前に姑臧に在って不自由な生活を送っていた鳩摩羅什を訪ねて師事したのであり、鳩摩羅什の最初期の弟子であった。その僧肇にとって維摩経は実に因縁浅からぬ經典であった。それ故、物不遷論・不真空論・般若無知論・涅槃無名論の諸論文を著すと共に維摩経に対する注釈を撰している。

その維摩詰経注序に、

余以闇短、時預聽次、雖思乏參玄、然僦得文意、輒順所聞而為注解、略記成言、述而無作、庶將來君子異世同聞焉。
(大正五五・五八b)

と述べている。のちに隋の法経録によれば僧肇の注について「維摩経注解 五卷」(大正五五・一四八a)と記している。しかも、彼の維摩経の義疏はトルファンからその一断片が発見されている⁹⁾。更に彼の注解は注維摩経の中に鳩摩羅什らの注釈と共に合せて編集されている。

その僧肇の維摩経研究に刺激されて新説を発揮しようとして維摩経義疏を著したのが竺道生であった。彼は大概涅槃経の伝訳に先き立って一闍提成仏の義を唱え、旧学守文の徒のために長安仏教界から擯斥せらるも、やがて同経が伝来するに及び、その先見性が歎ぜられ、広く秀悟を以て知られている。その竺道生が僧肇の維摩経の釈義を見て、更に新異を顕暢したため講学の匠にとって甚だ貴重な指針となったのである。出三蔵記集巻十五の道生法師伝に次の

ように記している。

関中沙門僧肇、始注維摩世咸翫味、及生更深旨顯暢新異、講学之匠咸共憲章其所述、維摩法華泥洹小品諸經義疏、世皆宝焉。
(大正五五・一一一b)

彼の維摩經の義疏は隋の衆經目錄に「維摩經注解 三卷 竺道生」(大正五五・一四八a)と記録されている。今その単行本は流伝していないが、注維摩經の中に多く引用されており、内容を窺うことができる。

鳩摩羅什の数千に及ぶ門弟の中で後世、関中の四子⁹⁾或いは四聖と称歎される竺道生・僧肇・道融・僧叡の維摩經研究の状況を概観した。右に述べた諸師の維摩經義疏は、甚だ残念ながら既に散逸して完本としては伝わっていない。ただ幸にして後人の編輯になる注維摩經のみが現存している。

注維摩經は鳩摩羅什訳の維摩詰所説經を一千数百余に分節してその經文を掲げ、經文の下にそれぞれ「什曰」「肇曰」「生曰」などと称して鳩摩羅什・僧肇・竺道生および道融(ただ一回のみ)の注を示している。一經文について什・肇・生の三師の注を掲げる場合もあれば、二師あるいは一師の注の場合もある。文殊師利問疾品の注の中で道融の注を一度だけ載せており、道融の見解の片鱗を窺うことが出来るが、奇妙なことに現行注維摩經には僧叡の注が認められない。このことを如何に理解すべきか、改めて検討を加えねばならぬであろう。唐の道液の浄名經集解関中疏には僧叡の注を屢々引用しているのである。そこで注維摩經の研究は、単に一大乗經典たる維摩經の現存最古の注釈書としての意義にとどまらず、当時の思想界の状況、仏教の受容過程やその流伝展開などを考察する上でも重要である。

注維摩經が仏教思想史上の多くの課題を有する資料でありながら、実はその編者はもとより成立の時期や流通の経緯等についても不明な点が多い。そこで注維摩經に関する基礎的作業として先ず種々の目録の記載を手掛りとして検

討する。現存最古の経録である出三蔵記集によつて前述の如く各師の維摩経義疏のことが出来るが、同書には未だ各師の注を会合した現行の注維摩経の如きものについては全く言及していない。しかし、隋の法経らが開皇十四年（五九四）に編した衆経目錄卷六の此土諸徳伝記に、

「維摩経注解 三卷 羅什」

「維摩経注解 三卷 竺道生」

「維摩経注解 五卷 釈僧肇」

（大正五五・一四七a、一四八a）

と三書のことを記録している。法経らが目錄編纂の時点では未だ三疏は会合されず、各々単行であつたことを示している。又、唐道宣の大唐内典録卷十では、鳩摩羅什について「注維摩、撰実相論」と述べ、僧肇に関して撰論注経の中で般若無知論などと共に「注維摩経」（大正五五・三三〇c）を挙げてはいるが、それらの内容や卷数については何らの記述もない。竺道生に関しては維摩経関係の著述を全く載せていない。

その後、大周刊定衆経目錄（六九五五年）、開元釈教録（七三〇年）、貞元新定釈教目錄（八〇〇年）等には当該課題に直接関係する記載は認められない。又、九世紀前半に入唐求法した諸師の将来目錄を検索するに、最澄の伝教大師将来台州録（八〇五年）、同越州録（八〇五年）、空海の御請求目錄（八〇六年）、常暁の請求目錄（八三九年）、円仁の日本国承和五年入唐求法目錄（八三九）、慈覚大師在唐送進録（八四〇年）などには、唐道液の浄名経集解関中疏四巻については屢々記載されている。道液の関中疏は当時の最新の著述であり、入唐の目的に照らして当然のことであるが、注維摩経に関する記載は全く認められない。注維摩経はすでに奈良時代に伝来し書写されており、改めて唐

に求める必要が無かつたのであろう。但し、常曉が承和六年（八三九）に上表した請來目錄には唐代の維摩經研究の情況について語っている。勿論、彼の見聞の及ぶ範囲内のことではあるが、甚だ興味深い記載である。

至開中液公、大宗蕪蔓、直極而開。今見大唐真典近代興隆講文学義之類、総此疏等以為指南、是故每寺講淨名典化度白衣、以液公疏提撕緇徒。

（大正五五・一〇六九c）

当時、道液の淨名經集解関中疏が維摩經研究の主流にあり、僧俗の間で特に持て囃されていたことが分る。他の入唐諸家の目錄や西域出土の仏典の中にも道液の疏が極めて多いことから、このことは十分に窺うことが出来る。もし唐代の仏教界に經の訳者である鳩摩羅什の維摩經疏や現行の注維摩經の如きものが広く流布していたとすれば必ずや維摩經研究の指南となつたことであらう。

現存の目錄に注維摩經の記載が認められるに致るのは、漸く高麗義天（一〇五五―一一〇一）の新編諸宗教藏総録においてである。即ち、義天録の第一に維摩經關係章疏の筆頭に、

（維摩詰經）注 十卷 什肇生三注

（大正五五・一一七〇a）

を挙げてゐる。ここでは編者名などはなく「什肇生三注」と付記し全十卷となす点より推して現行の注維摩經を指すものである。ほぼ同時期に成つた興福寺永超の東域伝燈目錄にも注維摩經を記載している。即ち、同目錄の衆經部に次のように記している。

僧肇等註 録云羅什三
維摩詰經註八卷

藏等註 亦名淨名集註

永超の記述によれば、この維摩詰經註はやはり現行の註維摩經を指すものと考えて不可ないであろう。ただ、その卷数については先の義天録とは相違して「八卷」と為している。その後の諸目録を検索するに、注維摩經について十卷本と為す義天録と八卷本と為す永超録のいずれかの系統に属しているのである。

十卷本の注維摩經とは、現に大正大藏經(第三十六卷)や続藏經(第一輯第二十七套)の所収本に相当する。しかしらば八卷本の注維摩經とは何か。それは既に学者が比定しているように大正大藏經が注維摩經の批校本として採用した「甲本」即ち大和多武峯の談山神社所藏の平安時代書写・浄名經集解が想定される。残念ながら筆者は未だ実見の機会を得ていないが、大正大藏經の校勘記によれば明らかに「巻第八」で終っており、八卷本であったことは確かである。この注維摩經の八卷本と十卷本との相違は如何に考えたらいのであろうか。最近の学界の論調を見ると、この相違は単なる調卷の異同とは見ず、僧肇の序文や涅槃經の引用の有無などを論拠として八卷本の談山神社所藏本を以て注維摩經の「古形」であると断定し、かゝる視点から本書の成立や編集の問題を論じている。学者は「古形」の八卷本から十卷本への改編は唐道液以後のことであるとか、八卷本と十卷本とは成立編纂事情が各々相違し、編者も別々であるなどと論じているのである。

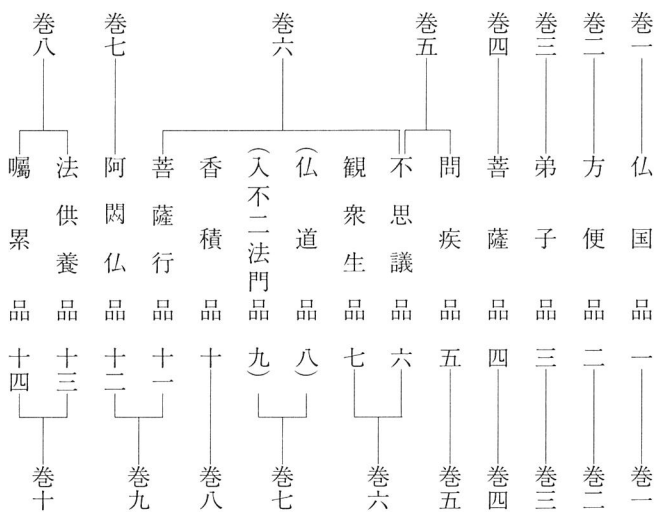
しかし、果して大正大藏經の対校本に採用された平安時代書写の「甲本」(談山神社所藏本)が成立の当初から八卷であり、注維摩經の「古形」と断定できるのであろうか。たとい、いかに古い時代の書写本であろうとも写本には必ず書写のもとになる原本が存する筈である。その原本も亦、八卷本であったか否かは甚だ疑問である。学者が云うように「その原本がどのようなものであったか、今はどうしようもない」という一面もあるが、極く僅かの手懸りを

生かして検討するとき、八卷本「甲本」の原本は実は十卷本であったと考えられる。談山神社所蔵の八卷本「甲本」（維摩經集解）が鳩摩羅什・僧肇・竺道生の三師の注を引く場合には「什曰」「肇曰」「生曰」と略称でもって示している。ところが、「甲本」の中でも数ヶ所に限って全く例外的に「羅什曰」「釈僧肇曰」「竺道生曰」と注釈者の具名でもって注釈文を引いているところがある。大正大藏經の校勘記によれば、「甲本」のうち「羅什曰」「釈僧肇曰」「竺道生曰」と三師を具名でもって示している箇所が都合九ヶ所認められるのである。即ち、「甲本」の中で(1)仏国品第一・(2)方便品第二・(3)弟子品第三・(4)菩薩品第四・(5)問疾品第五・(6)不思議品第六・(7)香積品第十・(8)菩薩行品第十一・(9)法供養品第十三の九ヶ所である。右の九品において三師の注を多数数収める中で各々第一番目の注釈のみが、夫々「羅什曰」「釈僧肇曰」「竺道生曰」と具名でもって挙げられている。各品における三師の注の第二番目以降はいずれも「什曰」「肇曰」「生曰」と省略名で示されている。このことが何を物語っているかといえ、各巻の巻頭、即ち各巻における各師の最初の注に限って「羅什曰」「釈僧肇曰」「竺道生曰」と具名でもって掲げ、次の第二番目以降は略して「什曰」「肇曰」「生曰」と称しているのである。従って、三師の注を具名でもって引用するところが「甲本」が書写する際に用いた原本の巻頭であったと考えられるのである。而らば「甲本」の書写の為の原本が九卷本であったかと思ふ否である。実は「甲本」には仏道品第八と入不二法門品第九の両品が欠落している。既に散逸して今は実際に確認することは勿論不可能であるが、恐らく仏道品第八の三師の最初の注には必ずや「羅什曰」「釈僧肇曰」「竺道生曰」と具名で以て示されていたことは想像に難くない。この事を基準として推し測るとき八卷本「甲本」のもとになった書写原本は八卷本ではなく、明らかに十卷本であった。

「甲本」八卷本とその原本たる十卷本との関係を図示すれば次の如くなるであろう。

(甲本)

(書写原本)



大正大藏經の校勘記によれば、「甲本」の不思議品第六の途中に「維摩詰經不思議品第六集解」とあり、菩薩行品第十一の末に「第六終」と記されている。「甲本」の卷一乃至卷五が各々仏国品から問疾品までの各一品に配されて

いるのに対して、第六巻のみが不思議品の途中から菩薩行品までの合計六品に亘っている。これは甚だ奇妙なことである。しかし、この「甲本」の不自然な調巻については大正大藏經の校勘記にも記されているように「甲本」の仏道品と入不二法門品との両品が欠落していることを念頭におかねばならない。それにしても「甲本」の巻六のみが都合六品に及ぶということは他の巻に比して分量的に非常に増大していることは否めない。そこで「甲本」が書写された上で、その流伝の過程で仏道品八と入不二法門品九とが散佚したのではなく、既に書写の原本である十巻本の巻第七（仏道品八・入不二法門品九）の一卷が書写の際に存在しなかった為に止むを得ずにかゝる不自然な調巻になったと考えられるのである。「甲本」の浄名經集註は維摩經十四品の注のすべてが書写された上で仏道品・入不二法門品の部分が散佚したのではない。もしもそうであるなら決してこの様に分量的に不斉合・不統一な調巻にはならないであろう。要するに「甲本」の書写の際の原本は十巻本であり、偶々その巻七のみが欠落しており、そこで書写に際して一卷当りの分量の斉合を計るために（原本が十巻本であったにもかかわらず）八巻に改編したのである。学界の一部において「甲本」八巻本をもって注維摩經の原始形態と為し「古形」と為しているが、「甲本」は右のように特殊な状況の下で成立したものと考えられるのである。八巻本をもって注維摩經の「古形」と為すことは全く根拠の無いことである。

現に「甲本」よりも古いと考えられる注維摩經の諸写本はいずれも十巻本である。例えば京都醍醐寺所藏の奈良時代書写の浄名經集註巻九は明らかに十巻本の一部であり、高野山正智院藏の平安時代初期の写本断片も巻八が見阿闍仏品十二に相当する点より推して八巻本ではなく十巻本であることは明白である。^⑧更に天平十九年七月六日の「荒田井牛養解 申勘出進事」（正倉院文書）などの史料も注維摩經が十巻であることを記録している。談山神社所藏の「甲

本」以外に奈良・平安時代に書写された注維摩經で八卷本は認められないのである。

そこで、八卷の維摩詰經註を記載する興福寺永超の東域伝燈目録については検討すべき多くの課題を残している。東域伝燈目録は、寛治八年（一〇九四）、八十一歳の永超が自ら校正して青蓮院に献じたものである。その東域伝燈目録の成立については井上光貞博士ら先学のすぐれた論考があり、当目録の成立の経緯を知ることが出来る。本録記載の典籍のうち、当時興福寺に所蔵していた奈良時代僧侶の著述百十一部には殆んど全部註記がないこと等によって判るように永超が実見した典籍には付記が無く、そうではなくて他の参考書によって記載した場合には忠実に一々註記しているのである。井上博士の調査によれば、その時に用いられた参考書としては東寺・安祥寺・梵釈寺などの寺院の目録、田珍録などの将来目録、貞元録・内典録などの中国の經典目録、三言録など日本の經典目録をはじめ、続高僧伝、恵沼伝・東征伝・空海僧都伝など広範に及んでいる。永超は先ず自己の周辺の蔵庫の書籍を主として記載して目録をつくり、それに欠けたものを右の参考書でもって補ったのである。

永超は維摩詰經註八卷の下に割注の形で「僧肇等註、録云羅什三藏等註亦名淨名集解」（大正五五・一一五一b）と記している。その記載の仕方から見て永超は周辺の蔵庫で維摩詰經註を実見することが出来ず、他の目録や伝聞などによって記載したものである。更にこのことを裏付けるように東域伝燈目録を仔細に検討すると甚だ奇妙な記載が認められる。衆經部に維摩詰經註以下四十九部の維摩經の章疏を記し、更にそれとは全く別処に「古録」によって二十卷泥洹經一卷乃至摩道經記一卷の十四部を載せた後に、

維摩經註解 三卷 竺道生

同經註解 五卷 僧肇

同經註解 三卷 羅什已上三部

可有維摩部

(大正五五・一一五四c)

と記録している。これは隋の法経らの衆経目録を参考にして補ったものである。しかもこの記事と先の維摩詰経註との関りについて何らの見解をも示してはいない。即ち、両方とも永超は実見せず、しかもその内容に関しても十分な知識を有していなかったと考えられる。そうでなければこの様な齟齬は生じないであろう。しかるに一旦、東域燈燧目録に注維摩經が八卷と記されるとその後の諸目録はこれをそのまま継承しているのである。従って現行の内容を有する注維摩經は本来十卷本として伝わっていたと考えられる。但し、特別な事情の下で書写された談山神社所蔵の「甲本」のみは八卷として伝わったのである。

ところが、これとは別に現行の注維摩經とは単に調卷上の相違でなく内容構成を異にする流布本が存在する。即ち、大正大藏經(卷三十六)・統藏經(第一輯第二十七套)所収本と、縮刷大藏經(呂軼)・金陵刻經処本などとは顯著な相違を示している。前者は羅什・僧肇・道生の注が共に多数であり詳密であるのに対して後者は三師の注が共に削減され簡略である。後者は前者の注の中からある意図をもって削除した要約本である。そこで前者を「広本」、後者を「略本」と称することが出来る。この広略両本は別々に編纂されたものでなく、「広本」が先ず成立し、それを簡略にしたのが「略本」である。但し、「広本」から「略本」への削除に際して三師の注が均等に削減されたわけではない。「略本」において鳩摩羅什と僧肇の注がほぼ半減しているのに対して竺道生の注は顯著に削られており、ほぼ一割の分量に激減している。「広本」では竺道生の注が六百余文も存するが、「略本」では約九割も削られて僅かに六

十余文を収めるのみである。このことが「略本」における顕著な特色である。しかし、そのことから「略本」が作られた目的を遽かに判断することはできない。竺道生の注の大部分が削られて僅かに残った注を読むとき、そこには何故に取捨選択されたのか、その必然性が見い出せないのである。「略本」の編纂意図についてはなお更に総合的な検討が加えられねばならないであろう。

ところで、中国で注維摩経が入蔵されたのは明の北蔵（明版大蔵経務帙）および清のいわゆる龍蔵（書帙）に於てである。その明版および清版の大蔵経に収められているのは、注維摩経の「広本」ではなくて「略本」である。但し、同じく「略本」を収めながら明蔵は十巻に、龍蔵は八巻に調卷されている。明蔵では仏国品の注が巻一と巻二に分かれており、弟子品の注が巻三と巻四とに、見阿闍仏品が巻九と巻十との両巻に亘っているが、清版ではこの様な都合を改めて八巻に調卷し直したのである。そのうちの縮刷大蔵経は明蔵を底本と為した十巻本であり、金陵刻経処で刻印刊行されたものは龍蔵による八巻本である。

よって現在流行する注維摩経を内容・構成の上から整理すれば、左記のようになるであろう。

- 一、広本
 - 十巻本…大正大蔵経所収本、続蔵経所収本、貞亨三年刊本等
 - 八巻本…談山神社所蔵平安時代書写本
- 二、略本
 - 十巻本…明版大蔵経所収本、縮刷大蔵経所収本
 - 八巻本…清版大蔵経所収本、金陵刻経処本

近年、学界において注維摩経に関する論文が陸續と発表されていることは大変に悦ばしいことである。所が、その中の幾篇かは奇しくも談山神社所蔵の浄名経集註、所謂「甲本」八巻本を以て注維摩経の「古形」と為し、本書の原

始形態や成立流伝を論じ、編者について考察するための根拠と為している。しかも、この「甲本」を注維摩經の「古形」と為すことが徐々に学界の定説の如くなりつつあるので、敢えて本書の異本問題について考察した。その結果、談山神社所蔵の八巻本は、本来、十巻本を原本として書写されたものであることが明らかとなった。注維摩經が有する多くの課題の中で思想研究を離れ、やや瑣末の問題に終始したきらいがあるが、右の如き背景があつてのことである。

註記

- ① 出三藏記集卷十三の支謙伝に「從黃武元年至建興中所出維摩詰・大般泥洹・法句・瑞応本起等二十七經」(大正五五・九七c)とある。同書卷二の新出經論録の支謙の条に、彼の訳出經典三十六部を挙げて「維摩詰經二卷 闕」(大正五五・六c)と記している。梁の僧祐はすでに支謙の維摩經を「闕」と為しているが、現に大正大藏經卷十六に「支謙訳維摩詰經 二卷」を収めている。竺法護訳との混乱があるのかもしれない。訳語など総合的な検討が必要である。又、支謙の訳出經典の総数についても既に出三藏記集の中において二十七部と三十六部の相違を示している。
- ② 高僧伝卷四(大正五〇・三四八c)参照。
- ③ 出三藏記集卷二に「自太始中至懷帝永嘉二年云々」(大正五五・九bc)とある。
- ④ 出三藏記集卷二の新出經論録に「異維摩詰經二卷」(大正五五・九c)と記している。同書卷二の新集異出經録の維摩詰經の条に「支謙出維摩詰三卷、竺法護出維摩詰經二卷、又刪維摩詰一卷、竺叔蘭出維摩詰二卷、鳩摩羅什出新維摩詰經三卷」(大正五五・一四a)とあり、竺叔蘭訳の維摩詰經の卷数に異同がある。
- ⑤ 竺法護の刪維摩詰經一卷について梁の僧祐は「先に維摩を出し煩重なり。護、刪りて出す。偈を逸するなり」(大正五五・八c)と述べている。
- ⑥ 出三藏記集卷二の支敏度の条、合維摩詰經五卷の下に「合支謙竺法護竺叔蘭所出維摩三本合為一本」(大正五五・一〇a)と註記して三訳を会合したものと為しているが、同書卷八所載(大正五五・五八bc)の支敏度の自序では支謙訳と竺叔蘭訳

との両本を合せ編集したと述べている。自序に拠るべきであろう。

⑦ 拙稿「維摩詰経と毘摩羅詰経」(『仏教学セミナー』第四十二号)参照。

⑧ 僧叡の注は唐道液の浄名経集解関中疏に「叡曰」と称して十数回引用されている。又、澄観の華嚴経随疏演義鈔卷四に「叡公維摩疏积公」(大正三三六・二七六c)と称して長文の引用が為されている。同書卷三十六にも「今但引浄名之言、余略不引、叡公积云」(大正三三六・二七六c)といい、僧叡の注を引用している。而るに僧叡の注が現行の注維摩経に収められていない。この件に関して元興寺の智光は「然叡融二師略為注釈、而不具論、故不入集解中」(日藏一四、三八七下)と述べているが、恐らく当を得たものではないであろう。後日、改めて検討を加えるであろう。

⑨ 白田淳三「維摩経僧肇单注本」(『聖徳太子研究』第十一号)等参照。

⑩ 例えば法華玄義积籤卷三に「関中四子即生肇融叡」(大正三三三・八三七b)と称している。又、仏祖統紀卷三十六の「羅什弟子有生肇融叡、时号関中四聖」(大正四九・三四二a)等参照。

⑪ 八卷本を記載する目録はおおむね永超の東域伝燈目録を継承する。例えば東武謙順の諸宗章疏録などは永超の註記をそのまま転記している。

⑫ 牧田諦亮「肇論の流伝について」(『肇論研究』二七五頁、田中塊堂『日本写経綜覧』三〇八頁等参照)。

⑬ 井上光貞「東域伝燈目録より見たる奈良時代僧侶の学問」(『日本古代思想史の研究』所収)参照。